

第21回夏期福音特別集会(3) (伊豆高原)

躓きのペテロ

——マタイ伝第7、16、17章——

1974年8月24日

小池辰雄

破れの存在 エホバはわが平安なり あるがまま 足を洗う 全身を洗う 贖い 恩寵が先
 キリストは躓きの石 ホ・クリストス 無私の根源現実 サタンよ、退け 己が十字架を負え
 復活のキリストの予表 永遠の現実

【マタイ7】

21我むかに対して主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。22その日おおくの者、われむかに対して「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐おいだし、汝の名によりて多くの能力ちからある業わざを為なししにあらざや」と言わん。23その時われ明白あらわに告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

【マタイ16】

13イエス、ピリポ・カイザリヤの地方にいたり、弟子たちに問いて言いたもう『人々は人の子を誰と言うか』14彼等いう『或人あるはバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人』15彼らに言いたもう『なんじらは我を誰と言うか』16シモン・ペテロ答えて言う『なんじはキリスト、活ける神の子なり』17イエス答えて言い給う『バルヨナ・シモン、汝は幸福なり、汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり。18我はまた汝に告ぐ、汝はペテロなり、我この磐の上に我が教会を建てん、黄泉よみの門はこれに勝たざるべし。19われ天国の鍵を汝に与えん、凡そ汝が地つなにて縛ぐ所は、天にても縛ぎ、地にて解く所は天にても解くなり』……

21この時よりイエス・キリスト、弟子たちに、己のエルサレムに往きて、長老・祭司長・学者らより多くの苦難を受け、かつ殺され、三日めに甦よみがえるべき事を示し始めたもう。22ペテロ、イエスを傍かたえにひき戒め出でて言う『主よ、然しかあらざれ、此の事なんじに起こらざるべし』23イエス振反ふりかえりてペテロに言い給う『サタンよ、我が後に退け、汝はわが躓物つまずきなり、汝は神のことを思わず、反かえつて人のことを思う』24ここにイエス弟子たちに言いたもう『人もし我に



従い来らきたんと思わば、己をすて、己が十字架を負いて、我に従え。25己が生命を救わんとを思う者は、これを失い、我がために、己が生命をうしなう者は、之を得べし。26人、全世界をもうくとも、己が生命を損せば、何の益あらん、又その生命の代しろに何を与えんや。

【マタイ17】

1六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネを牽ひきつれ、人を避けて高き山に登りたもう。2斯かくて彼らの前まへにて其の状さまかわり、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ。3視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現る。4ペテロ差出でてイエスに言う『主よ、我らの此処ここに居るは善し。御意ならば我ここに三つの廬いおりを造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤの為にせん』5彼なお語りおるとき、視よ、光れる雲、かれらを覆おおう。また雲より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦よろこぶ者なり、汝ら之に聴け』6弟子たち之を聞きて倒れ伏し、懼おそるること甚はなだし。7イエスその許にきたり之に触りて『起きよ、懼おそるな』と言いい給えば、8彼ら目を挙げしに、イエス一人の他は誰をも見えざりき。

●破れの存在

何といつても、ペテロは地上においては、キリストに一番関わりのあつた男です。関わり方が躓きという角度で関わっている。躓いたり転んだり滑ったり倒れたり、そういうペテロをキリストは愛された。そうであるから、福音であるので、

「あれは立派だから」

といつて顧みたのではない。ユダヤ人は頑かたくなであるから、神さまに捕らえられた。ユダヤ人は相変わらず、まだ頑かたくなですが、なにしろ、キリストを認めない。とにかく、やつかいな者を神さまは相手にしている。

皆さんもいろいろやつかい小僧だというわけで、どうにもならん。人間は実は、大いに立派そうだけでも、立派そうな人も実はどうにもならない。

「どうにかなっている」

なんて思っているのは、実は錯覚なんです。

我々は破れの存在である。今の若い方は、聖書を創世記からお読みになると、

「何だこれは、おとぎ話ではないか。神話ではないか。クリスチャンは何故こんな

ものを信じているか。馬鹿くさい」

なんて思うのが大体の判断であります。お気の毒な判断です。そういった神話的な表現で、実は非常に深刻な現実が語られているのに気がつかない。自分たちの現実が語られていることに気がつかないで、神話扱いにしている。



「アダム、イブのパラダイス・ロスト、樂園喪失は神話であって、原罪とか何とか言って、そんなところから我々の罪と何の関わりがあるか」

と思っっているが、どっこい、本当は一番関わりがある。そのことに気がつくまでは、どうにもならない。

今の、いわゆる自然科学的な思惟——自然科学を何もけなすわけではないが——そういうものをもつて、魂の世界を同じ思惟でもつて考えるから、大間違いだと言っている。物事にはいろいろな範疇はんちゆうがありますから。聖書というものは、この世のいろいろな範疇とは合わない。そういうものを超えている。イズムや範疇を超えている。聖書の関わり方に気がつかないと、いつまでたつても聖書は関わりのない本になってしまう。そのことをペテロという存在が、実は躓つまずきの存在でもつて一番よく表してくれた。「あれはペテロだ」なんて思っ
てはいけない。

「汝はその人なり」

と、預言者ナタンにダビデが指し示されたように、我々は即ち「汝はその人なり」と言われるわけです。

早く、この破れに気がつかないといけない。人間は破れの存在なんです。キリストという方は我々のあらゆる存在を、みな身で引き受けている。あるがままの我々はどんな存在であつても、キリストは引き受ける。ところが、そうでなくて、偽っていると、キリストにやられる。立派そうな顔をしていると、キリストに

「何事かつ!」

とやられる。一番立派な選手は誰かというと、パウロなんです。

「律法の義につきては責むべきところなし」

と、パウロは非常に誇り高い男で、その書簡の中に「誇る」という言葉がたくさん出てくる。コリント後書あたりに随分出てくる。ところが、ダマスコ途上で、パウロはその天狗の鼻を折られてしまった。それで、パウロはコテンコテンにキリストにやられてしまつて、

「自分は大間違いをした。自分は塵芥ちりあくたであつた」

ということに気がついた。

●エホバはわが平安なり

ヨハネ伝13章1節から読みます。

↑すざこし 過越すざこしのまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来きたれ
るを知り、

「過越のまつり」というのは、いわゆる「ニサンの月」というので、大体14日の夕方から始まるわけです。どういう死に方をするか、キリストはちゃんと先が見えていらつしやる。スウェーデンボルグが自分の死ぬ年月日まで示されてその通り逝つたというけれども。



世に在る己の者を愛して極まで之を愛し給えり。

「極みまで」という言い方は原語で言うとき、世の末までという時間的な極まりで、もういよいよギリギリのところまでという意味と、質的に深くという意味が、そこからむしろ発生してくる。時間的な概念の方が先です。言い換えると、キリスト再臨の時まで愛しぬくような気持が、この「極みまで愛したまえり」ということです。具体的、相対的なところから言うとき、「最後の晩餐まで」ということ。ギリギリの時刻まで愛された。

2 夕餐のとき悪魔、早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを
売らんとする思を入れたるが、

過越の祝いの食事、最後の晩餐のとき。ユダというのは、なかなか立派な優れた弟子であった。優れた人が危ない。

神・キリストを通しての人間関係なら、本当の平和がくる。縦の関係を平安という。キリストが、

「汝ら、安かれ」

と言われるときには、キリストが我々一人びとりに向かって「安かれ」と言われる。「シャローム」とは本来縦の関係の言葉です。士師記6章でギデオンが神さまに救われて、力を与えられたときに、

「エホバはわが平安なり」

と言ったのが基礎なんです。あの士師記6章はその意味で非常に大事なところです。神と我々一人びとりの関係がはつきり立っている。我々においては、神・キリストです。キリスト抜きにしてはいかん。キリストを通しての神との関係、あるいは直接にキリストとの関係と言ってもいい。それが「平安」のところなんです。そうしたら、自ずから平和になる。

もしこれが自ずから平和にならないで、クリスチャン同志がどうの言いかつているなら、本当にキリストとの関係が立っていない。関係と言ったって、ただ構造ではない。血が流れていなくて、霊の血が。それが聖霊なんです。聖霊を抜きにしたキリストとの関係なんてあり得ない。そんなものは観念だ。あり得ないこともないけれども、そういう観念信仰がたくさんあるわけだ、気安め信仰が。

聖霊があると、共通な聖霊が流れていますから。御霊の子らがお互いに争ったら、これは御霊の子らではない。本当に突き抜けていなければ。

「どうだこうだ」

と、すぐ相対的な判断をする。人間だから、いろいろな癖はあるさ。そんなものを一々どうのこうのやってたら、おさまりがつかない。

「もうひとつ、乗り越えましょう」

ということなんです。クリスチャンというのは、どうして妙に頑なんだろうね。



●あるがまま

人間の在り方というものは、実は我々すら判断ができない。神さまだけが、本当は判断なさる。しょうがない。誰が天国へ行くか、誰も知らん。

「聖書を何年読みましたから、教会に何年通いましたから、天国への切符がいただけます」

なんてなわけにはいかない。キリストの「キ」の字も知らなくたって、天国へ行く。妙な人間的な狭つくるしい考えは福音ではない。キリストがなぜ限定できないか。いろんな教派ができたり、いろんな神学者がいろんなことを言ったり。あまりキリストがつかいのだから、それを何か限定しようとするから、みんなおかしいことになる。

「イエス・キリストは無限無量なり。おしまい」

でいい。後は本当にキリストと一緒に生きることだけです。

この花だって、ここところは虫が喰っている。造花で、虫が喰ったような花を造ったら、その造花を造った人は非常に自然を知っているわけだ。花びらや葉がみんな立派で、

「ああ造花はきれいだな」

なんて、あまり人間的完璧なものは偽りです。人間は不完全なもの、破れのもの、泥だらけのものだ。ドイツのヴルツブルクという所の人形屋さんは、子供の頬に泥がついているような人形の姿を造る。本当に自然の子供らしい。いわゆるきれいでない。さすがにドイツのおもちや屋さんだなと思った。

あるがままの姿が貴い。人真似は要らん。ここにいらつしやる一人びとりの顔と同じ人は、世界中に何十億人いたって、同じ人はいないわけだ。そういうように、一人びとりは天下一品に造られている。それが人格ということだ。神に造られたる絶対的な質がそこにある。しかしながら、それは神において絶対なので、手離しの絶対ではない。手離しでは、私たちは相對のダメのカスに相違ない。

そこらの気合がお分かりになりますね。真理というのは、一面から語ったら、必ず他面が落ちてしまう。少なくとも両面がある。そういった弾力性のあるものです。日本刀は鋼鉄と軟鉄からできている。それでしなう。そして強い。柔軟でありながら強いという。柔と剛とが一つになっている。柔だけでもダメ、剛だけでもダメ。本当の人間は男でも女でも、その中に男性的なものと女性的なものが、何とも言えない微妙な構造で入っていないければ、本当の人間ではない。だから、たとえ独身であつてもひとつも悲観することはない。

「私は男であり、女であり」

と。

●足を洗う

3 イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしことと、己の神より出でて神に



到ることを知り、

非常に深く書いてある。やがて天界に到るキリストは一切を掌握する。神より出でて神に帰る。

「万よろずのものは神より出でて、神において成り、神に帰するなり」

と、パウロが言っている通りです。

4 夕餐ゆうげより起ちて上衣うわぎをぬぎ、手巾てぬぐいをとりて腰にまとい、5 ついで鹽たらいに水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏まといたる手巾にて之ぬぐを拭いはじめ給う。

目に見るように書いてある。最後の晩餐で、キリストはこういう事を先ずなさった。

6 斯ごとてシモン・ペテロに至り給えば、彼かれいう『主よ、汝ぬがわが足を洗い給うか』
ペテロがだいぶ後あとだったらしい。

「あなたが私の足をお洗いになるんですか」

「そうだよ」

と。

7 イエス答えて言い給う『わが為ためすことを汝ぬがいまは知らず、

もう、キリストは、なさる事にはちゃんと徴しるしがあるわけです、啓示の意味が。

「今は分からない。だから、お前はそんな事を聞く」

と。しかし、正直に聞いてよかった。

後にのちに悟さとるべし』

「後に」というのは、

「私が十字架を通つて、それから甦よみがえつて、それから聖霊が臨まんできたら、分かるよ。

それまでは分からん」

と。この「後に」は非常に深い「後に」です。いい加減な「後に」でない。

「私はお前とこんなに関かりなく今いままで暮くらしてきたけれども、もうお前と会あわなくなると、しかし、やがて、もつと親かしくなる」

と、こういうわけだ。後に悟る。後に覚者さくしやとなる。後にブツダとなる。

8 ペテロ言う『永遠とこしえに我が足をあらひ給たまわざれ』

「いつまでも、私の足を洗うような事はよしてください」

と。「足を洗う」ことは、もちろん「罪を贖あがなう」ことです、キリストのおつしやる意味は。罪の贖あがないです。足を洗うことにおいて——我々の心には泥どろが付ついている——即ち、我々の心の泥どろを洗う。罪、自我、我執わがしやく、エゴイズムを除く。これが「足を洗う」ということです。

「エゴイズムを除かないでよいのか」

というわけだ。「永遠とこしえに洗あわざれ」とは、

「私はこのままでいいんです」

と。そうはいかん。



イエス答へ給う 『我もし汝を洗わずば、汝われと関係なし』
今度は、「汝の足」とは言わない。

「汝を洗わずば、お前を洗わないならば、汝われと関係なし」
これは非常に強い言葉です。絶対に忘れてはならない。私たちはキリストに洗われなかつたなら、どうにもならん。キリストは私たちに関わりをもつというのは、この

「罪を除く、我執を取る」

という意味でキリストは関わりをもっている。人間はどんなに立派でも、パウロが言っている通り、

「義人なし、一人だになし」

ということ。お体裁の立派なんでもものは大したことない。いわゆる道徳家なんて言つたつて、もう少し光をもつてみると、みな偽善者です。

「偽善なる学者・パリサイ人よ」

と、キリストが言われた「偽善」というのは、「口を義とする」ことを偽善という。いわゆる偽善よりか、あの言葉はもっと深い。偽りの善なんです。神さまから来ている善が本当の善で、人間が自分でもつていると思う義だの善だのは、みな偽義、偽善なんです。もう、鼻もちならん。それから、宗教家臭いのも。あまり、二言目には、「お恵み」とか「お示し」とか言わない方がいい。黙つて福音を証していれば、口では言う必要ない。

「関わり」をもうひとつ言つと、「結び」になる。キリストの罪びとへの関わりは、

「罪を除いて本当の結びつきになろう」

というのが、キリストの関わりの目的なんです。ラテン語の「レリギオ(宗教)」という言葉は「結び返し」という言葉です。「レリガール」とは再結、再び結ぶこと、結び返し。今まで結びが解けてしまつていたので結び返す。キリストは、

「我もし汝を洗わずば、汝われと関係なし」

と言われる。我々は、

「あなたが私の足を洗つてくださらなければ、私はどうにもなりません。自分で自

分の足が洗えないんです」

というわけです。自分で自分の足が洗えない。自分の罪はどうにもならん。

立派そうな人も、いざ死を迎えるようなことになったり、或は非常な人生の不幸にでつくわしたりすると、ガタつきます。あるいは、諦めたり。ひとつも本当の勝利がない。

ソクラテスもやつぱり「ダイモニオン」に、霊に導かれた人です。プラトンもそうです。とにかく、第一級の人物はみな、聖き霊という、言葉の正しい意味においての霊的な人物です。「霊的」という言葉はヘタすると、非常に誤解になる。私たちにおいては、「聖霊における」ということです。



● 全身を洗う

9 シモン・ペテロ言う『主よ、わが足のみならず、手をも頭をも』

足は一番汚いところ。その足を洗うということは、もちろん、全身を洗うことなんです。だから、ペテロが「手も頭もみんな洗ってください」と言ったのは、ある意味においては、当たっている。

「全身を洗ってくださいよ」

と。なかなか、押しが太くできている。

10 イエス言い給う『すでに浴したる者は足のほか洗うを要せず、全身きよきなり、斯く汝らは潔し、されど悉ことごとくは然らず』¹¹これ己を売る者の誰なるを知りたもう故に『ことごとくは潔からず』¹²と言ひ給ひしなり。』(ヨハネ13・3~11)

みんな洗ってやった。

「私が洗ったということは、やがて本当に洗ってやるんだぞ」

という徴なんです。ところが、

「私の洗いを本当に受けない者がある」

それはユダ。キリストを売ろうとした。サタンが入ってきた。キリストを妬ねたんだ。

「妬み」というのは困った言葉だ。旧約では妬みという言葉が出てくるから間違わないでください。

「我は妬みの神」

とある。あれは、

「諸々の神々が他の民族にはある。けれども、お前イスラエルにとつては、私の面前では私だけがお前の神で、他の神々はあれども無きにひとしい。そういう他の神々を、もし拝むようなことをすれば、私はお前を追及するぞ。これが私の妬みである」

というのが、「妬みの神」ということです。

「それほど、お前たちを私は愛惜している」

愛し惜しんでいる。その愛惜の気持を「妬み」という言葉で表した。

「この一対一の関係を破ることはいかん。それは宗教的姦淫である」というわけです。

もちろん、人間的ないわゆる妬みの感情は悪いですから、パウロもヨハネもヤコブもはつきり言っている。そういう意味の妬みではないから、そこは躓かないように。「妬み争い」と言う。女はヘタすると嫉妬の気持、妬みが強い。男はすぐ喧嘩する、争う。この妬み争いから抜ける。もう少し具体的に言うと、

「お前たちの妬み争いを洗ってやるんだ」



というわけだ。

「罪の根底は洗ったのだから、もう他は洗うことはない。全身が潔い。中心の悪をとり除いたから、もう全身は潔いんだ」

と、その通りです。枝葉末節は問題でない。根幹が問題である。一番根源の現実が問題である。

「根源の現実を、自我からすつ飛ばしてやる、洗ってやる」

これが別な言葉で言うところ「贖い」なんです。

「¹²彼らの足をあらひ、己が上衣をとり、再び席につきて後いい給う『わが汝らに為したることを知るか。¹³なんじら我を師また主となう、然か言うは宜なり、我は是なり。¹⁴我は主また師なるに、尚なんじらの足を洗いたれば、

汝らも互いに足を洗うべきなり。』(ヨハネ13・12〜14)

そこで、

「お前たちも互いに足を洗いなさい」

ということとは、

「他人の罪を赦せ」

ということですよ。私たちは人の罪を洗うことはできない。キリストは「洗え」とおっしゃるけれども。これは赦す。赦すのも、人間が偉そうにして赦すのではない。キリストに赦されたから、キリストの赦しをもって赦すということです。どこまでも、キリストの赦しをもってということ、我々が人を赦したなんて、そんな高慢な気持ではありえない。イエス・キリストに徹底的に赦された者は人を審くことができない。これは「主の祈り」にも出てくるとおりです。

●贖い

そこで、キリストが言われた「もう洗った」ということを、贖いという角度でとらなければいけないので、その話を少しいたします。

「贖い」という言葉は、ヘブライ語に二つ言葉があります。一つは「ガアル」という言葉。これは

「自由にする、釈放する」

というような意味をもっています。もう一つは「パーダー」という言葉。

「身の代金でとり返す」

ような意味です。ガアルもやっばり同じような意味でも使う。

「償う、請け戻し」

とか。もともと「身請け」したりするような言葉が、もつと霊的な意味で使われているわけです。「贖い人」「ゴアロー」という言葉がレビ記25章25節に出てます。贖う人という、社



会学的な意味の言葉です。申命記19章、ヨシユア記20章、民数紀略35章にも出ている。ヨブ記19章25節に非常に著しい言葉が出ている。

「われ知る、我を贖う者は活く」(ヨブ19・25)

という。正に「ガアル」という字から来ている言葉です。

「²⁴望むらくは鉄の筆と鉛とをもて之を永く磐石に鑄つけおかんことを。²⁵われ知る我を贖う者は活く、後の日に彼かならず地の上に立ん。²⁶わがこの皮この身の朽はてん後、われ肉を離れて神を見ん。²⁷我みずから彼を見たてまつらん。我目かれを見んに識らぬ者のごとくならじ、我が心これを望みて焦る。」(ヨブ19・24、27)

「しかし、やがて私のために執成して贖ってくださいる人が来る」

とヨブは自分の義を主張してやまない。しかし、ヨブは最後に神さまの前に平伏しました。それから、著しいところはイザヤ書43章です。

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此にい給う、イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給う、おそるるなかれ我なんじを贖えり、我なんじの名をよべり、汝はわが有なり。」(イザヤ43・1)

という非常に力強い言葉です。「私は汝を贖った」と。これは、イスラエルの罪のためにアッシリヤ、バビロニアに滅ぼされた。そして、捕囚の70年間を過ぎて、バビロニア捕囚から帰って来た。そのときに出たのが「第二イザヤ」という——イザヤ書の40章から55章まで——無名の預言者です。そこで、

「おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり、汝はわが有である」

「もういい、すっかり贖った」

と。「国滅びて、なお神の民あり」ということです。

「イスラエルは国が滅びてもなお神の民がある」と言う。

「国滅びて山河あり」

と言うけれども、イスラエルは神の民として、いつまでも歴史の終りまで、もちろん続いた。ただ、残念ながら、キリストを否んでいるところに躓きがある。彼らの躓きはキリストに躓いています。ペテロもやはりユダヤ人で、さんざんキリストに躓いているわけだ。そのうちに、ひっくり返される。

● 恩寵が先

それからイザヤ44章、これも素晴らしい言葉です。

「²¹ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ、汝はわが僕なり、我なん



じを造れり、なんじわが僕なり、イスラエルよ我はなんじを忘れじ。 ²²我なんじの愆を雲のごとくに消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり、なんじ我にかえれ、我なんじを贖いたればなり。」(イザヤ44・21〜22)

これは非常に力強い言葉です。

「もう贖ってしまったから、帰ってこい」と言う。「帰ってきたら、贖う」ではない。「お前は帰ってきたら、贖ってやる」というのではない。

「もう贖ったから、心配しないで帰って来なさい」

と。恩寵が先なんです。恵みが先なんです。

「帰ってきたら、恵みをやるよ」

ではない。そういう言葉はエレミヤの中にもある。とにかく預言書というのは素晴らしい。

「¹⁸われ固にエフライムのみずから歎くをきけり、云く、汝は我を懲しめたまう、我は軛に馴ざる犢のごとくに懲治を受けたり、エホバよ汝はわが神なれば我を牽転したまえ、然ば我転るべし。」(エレミヤ31・18)

「私が帰りますから」ではない。

「私を引き戻してください、そうしたら帰ります」

と、やっぱり神さまの力に頼っている。あなたの力がなければどうにもならん。小さい子供が、

「お母ちゃん、私を起こして。そうしたら、起き上がれるから」

と。自分では起きられないんだ、ぶっ倒れてしまって。母親に抱き上げられて、立ち上がるといわけだ。

「¹⁹我転りし後に悔い、教を承しのちに我牌を撃つ…」(エレミヤ31・19)

とある。帰ってからのちに悔いた。悔いてから帰ったのではない。本願の力、その角度を預言者は受けとっている。

「既に贖ったぞ」

と、現在完了です。であるから、

「もう心配ないから」

ということ。さっきのイザヤ書44章22節に、

「罪は雲散霧消した」

と書いてある。我々は罪から解放された。これが贖いです。その一番深刻な表現はイザヤ書53章です。

「彼が砕かれたことによって、我らの罪は拭いさられた。罪は赦された」

と。イザヤ書53章は旧約の絶頂です。私が

「砕けの神学」



と言ったのは、そこからです。神さまの「痛み」だけではしょうがない。もちろん、神の痛みはあるけれども、痛みではどうにもならない。神さまの痛みのお愛だつたら、私たちはつらい。神さまは我々のことを痛んでおられる。しかし、キリストの砕けでもって、罪は雲散霧消して喜びの世界に入る。キリストの砕けを通して聖霊が来なければ、喜びの世界には入らない。我々の現在は、どんなに繕つくろっていても、そんな繕つくろいはよした方がいい。破れそのものです。

●キリストは躓きの石

「キリストの砕けの贖いを受けろ」

というのが、キリストが足を洗うということをもつて、やがて十字架の贖罪のことを予表されたわけです。

「今に分かるぞ」

というのは、

「私が十字架でお前たちの罪を贖つたら、そうしたら、私の言ったこと、したことがみんな読めてくるぞ」

ということですよ。それまでは、ペテロはこんなにキリストと親しいんだけど、しょつちゆう躓つまずいたり転ころんだりしている。キリストは躓つまずきの石なんだ、逆に言う。躓つまずくわけなんだ。

イザヤ書28章を見ると書いてある。

「このゆえに神エホバかくい給う、視よわれシオンに一つの石をすえてその基もととなせり。これは試みこころをへたる石、とうとき隅石すみいし、かたくすえたる石なり。

これに依頼よりたのむものはあわつることなし。」(イザヤ28・16)

この棄てられたる石は神に拾すわれている石となつて、隅すみの首石おやいしとなるとということが詩篇118篇のところにしている。

「22 工師いえつくりのすてたる石はすみの首石おやいしとなれり。23 これエホバの成なたまえる事に

してわれらの目にあやしとする所なり。」(詩篇118・22・23)

「工師いえつくりのすてたる石はすみの首石おやいしとなれり」

と。あれはヘッドストーンで、隅のおや石と言うと何か土台石のように思うけれども、建築の頂点にある。しかし、私は日本語的に隅の首石を土台石みたいにかるときは話しますけれども、本来は頭にある石なんです。どつちみち、一番中心となるところの石です。そして、これに躓つまずくということ、ロマ書9章に出ている。

「31 イスラエルは義の律法を追求おひもとめたれど、その律法に到らざりき。32 何の故か、かれらは信仰によらず、行為おこないによりて追求おひもとめたる故なり。彼らは躓つまずく石いしに躓つまずきたり。33 録しるして『視よ、われ躓つまずく石、礙さまたぐる岩をシオンに置く、之に依頼よりたのす



「む者は辱しめられじ」とあるが如し。」(ロマ9・31〜33)
 これはパウロがイザヤ書のこの言葉をそういうように引用して、
 「依り頼まなければ躓く」

と言っているわけです。

パウロやキリストの旧約の引用の仕方は、それを自分の角度からグツと掴んで適当にやつてしまえますから、いわゆる文法的になんかやつてない。

ペテロ前書2章のところにはつきり出ている。

「6 聖書に『視よ、選ばれたる貴き隅の首石を我シオンに置く。之に依り頼む者は辱しめられじ』とあるなり。7 されば信ずる汝らには、尊きなれど、信ぜぬ者には『造家者らの棄てたる石は、隅の首石となれる』にて、8 『つまずく石、礙ぐる岩』となるなり。彼らは服わぬに因りて御言に躓く。これは斯く定められたるなり。」(ペテロ前2・6〜8)

イザヤ書8章にもあつた。

「13 なんじらはただ万軍のエホバを聖としてこれを畏みこれを恐るべし。14 然らばエホバはきよき避所となりたまわん。されどイスラエルの両の家には躓く石となり妨ぐる磐とならん。エルサレムの民には網となり機檻とならん。15 おおくの人々これによりて躓きかつ仆れやぶれ、網せられまた捕えらるべし。」(イザヤ8・13〜15)

預言者は既に、キリストに躓くところのユダヤ人に対して警告を発している。パウロも躓いたけれども、躓いてぶつ倒れたら、目が覚めた。躓きつぱなしではダメですよ。躓いてぶつ倒れて、目が覚めなくては。

「我が目より鱗のぶつ倒れるときも落ちたり」

とならなくては。

キリストは、例えればガリラヤ湖です。すべての預言者の流れはキリストに流れ込む。天界の預言者たちはキリストに天界で讚美しているでしょう、

「あなたこそが本当にメシヤである」

と言つて。ユダヤ人がそこに来てもらいたいんだけれども。

イエス・キリスト自身に、我々の常識では躓く。だから、キリスト教にみんな来ない。いわゆる新興宗教にはワツシヨイ、ワツシヨイと行くかも知れないけれども。キリストは躓きの石だから、そう簡単に入れない。ということは、自分の常識的な判断や今までの単なる理性とか感情とか、そんなことでもって直線的には入れない。先ず、躓きの石に躓いてぶつ倒れて、それから起き上がってください。

私は割合に躓かなかつたけれども、後からまた躓いたり何かしている。割合にスーッと入つたように思うけれども。しかし、これがいかに躓きの石であるかということとは、入つ



てみると分かる。本来の我には、これは躓きである。パウロが言っている。

「十字架は――罪の贖い、足の潔めは――お前たちユダヤ人には躓きである。ギリシヤ人には愚かである」

馬鹿げたことであると。

「いわゆる人間的な知恵には、十字架が罪を贖うということは愚かなことで、ユダヤ人には躓きとなる」

と、パウロははつきり自分の体験からものを言っている。

そういう意味において、贖いということ、この「洗足」ということにおいて、しっかりと掴んでいただきたいわけです。

●ホ・クリストス

それから、今度はマタイ伝16章にいきます。ペテロのキリストとのドラマチックな会話の一つです。

「¹³イエス、ピリポ・カイザリヤの地方にいたり、弟子たちに聞いて言いたもう
う

いよいよ最後の旅に向かう前です。一応、伝道が終ってしまった。

『人々は人の子を誰と言うか』¹⁴彼等いう『或人^{ある}はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人』¹⁵彼らに言いたもう『なん

じらは我を誰と言うか』¹⁶シモン・ペテロ答えて言う『なんじはキリスト、

活ける神の子なり』

「あなたがこそがメシヤでありたもう、活ける神の子である」

と。「ホ・クリストス」と、定冠詞がついている。「油注がれたる者」というのは普通名詞ですけれども、これはナザレのイエスにだけに使う言葉です。私たちは「ホ・クリストス」ではない。私たちは「クリストス」、キリストの油注がれたる者だけでも、

「ホ・クリストス」「ザ・クライスト」

となると、これはキリストのことだけです。

「マーシユアツハ」「メシヤ」

は、

「神の霊の注がれたる者」

という意味です。特別な存在です。

¹⁷イエス答えて言い給う『バルヨナ・シモン、汝は幸福^{さいわい}なり、汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり。¹⁸我はまた汝に告ぐ、汝はペテロなり、

「お前は磐^{いわ}である」と。



我この磐の上に我が教会を建てん、黄泉の門はこれに勝たざるべし。19 われ
天国の鍵を汝に与えん、凡そ汝が地にて縛ぐ所は、天にても縛ぎ、地にて解
く所は天にても解くなり」(マタイ16・13〜19)

「この言葉は後から付け加えた」

と学者が言う。多分そうでしょう。あるいは、新しい説では

「いや、やつぱりキリストは言われたんだ」

とも言おう。「エクレシヤ」「教会」という言葉は福音書に二回しか出てこない。キリストはこ
のときに

「教会を建てて」

とは仰らなかつた。もう、神の国は近いんだから、「神の民」ということは仰つたけれども、
「教会を建てて」というのは、やはり後から教会の基礎づけのために付けた言葉だろうと思う。
「天国の鍵」云々は、或はキリストがそういうことを仰つたかも知れないけれども、「教会を
建てて」だけは余計だったかも知れない。プロテスタントは大体このところを否定し、カ
トリックはそのまま受けとっているわけです。どっちでもいいですよ。もうひとつ大胆に
言うと、たとえキリストがもしこれを仰つたとしても、何も私たちは躓かない。

「お前は岩である。神の国の土台石の一つにする」

と、私たち一人びとりがペテロと同じように土台石の一つびとつになる。そして、我々一
人びとりがエクレシヤの基礎になれる。

「ギリシヤ語やヘブライ語を勉強したから」

と、そんなことではない。ペテロは無学の凡人です。パウロは学があつたかも知れないが、
ペテロは無学です。それぞれの器をのつべきならないように、キリストはお使いになるから、
あなた方一人びとりを本当にエクレシヤの小さな基にする。

●無私の根源現実

「二、三人わが名によりて集まる所に我も在るなり」

と。「わが名によりて」という、この「名」がいい加減な名だから困る。「わが霊名」なんだ。
御霊の宿っている名ですから。キリストの名を御霊の宿っている名として受けとってい
なければ。

仏さんの世界でもそうです。「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」は、親鸞や日蓮が称え
れば、えらいことが起きてくる。けれども、本当に仏の霊を受けてないで、百万遍称え
たつてどうにもならん。法然は一日三万回称えたいらしいけれども、親鸞はそんなことはあまり
しなかつたらしい。日蓮が「南無妙法蓮華経」と言えば、龍ノ口で斬られそうになつたつて、
斬ろうとした奴がぶつ倒れますよ。

「果たして歴史的に本当だったか」



なんて、そんなことを探ることはない。本当なんです。霊の世界を少しわきまえている人は、日蓮くらいの人ならもちろんそうです。それで、不思議な光が現れたりする。

皆さん、どうぞ、大胆に進んでください。「懼れなく」というのは、「懼れるなかれ」ではなく、むしろ逆に「大胆に」ということです。

十字架のキリストと聖霊のキリストは離してはいけません。これを離していると、霊がおかしなことになる。本当に平伏しの世界は、無の世界は十字架が与える。即ち、無というのは罪から解放されている姿が無なんです。「私がある」ということが「罪」ということだから、「私が無い」ということは

「罪からはずされている」

ということ。悟って無私となったのではない。無私という根源現実をキリストの十字架は私たちに与えていらつしやる。

「私はどうもまだ私心があつて…」

なんて、何を言うか。そんな私心なんか、いくら雲がかかったついでいいよ、雲のもうひとつ上の世界に行ってみる。雲なんかありはしないから。この無私はもうひとつ上の成層圏の世界なんだ。雲がいくら漂ったつて、そんなことは気にするな。もう成層圏に置かれている。成層圏には霊気が、キリストの聖霊が吹きまくっている。だから、

「十字架と聖霊は離してはいけません」

と私は言っている。十字架がなくなると、その人は、何だか知らないけれども、傲ります。宗教現象では、祈りの世界で何か現象が起きるかも知れません。同じような現象が起きてても、質が違ふんです。そのことは、恐ろしいことをキリストが言つてらつしやるから。マタイ伝7章。

「21我に對いて主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。」

自分の霊力とかということではない。「御意を體現する者だけだ」と。

22その日おおくの者、われに對いて「主よ主よ、我らは汝の名によりて予言し、汝の名によりて悪鬼を逐いだし、汝の名によりておおくの能力ある業を為ししにあらざや」と言わん。23その時われ明白に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」(マタイ7・21〜23)

という恐ろしい言葉がある。キリストの名を借りてサタンが悪いことをする。

「あれはキリストの名が称えられているからいいではないか」

なんて、どっこい、質が違う。だから、本当にキリストの名が称えられる土台には、十字架がなかったならば、贖いをはつきりと受けとつていなかったならばダメなんだ。キリストの名を語つて不思議な業までできる。「こんなにはないか」と言つても、

「それはお前たちは自分の何かにしている。聖霊の事態を、聖名の事態を私してい



る。私は知らんぞ」と、キリストが言われる。

モーセがこれで一遍躓いた。モーセが岩を撃つたら、水が出てきた。その時にエホバの聖名を畏れていなかったとみえます。それで、そのためにモーセは神さまにやられた。

だから、本当に霊的な人は自分が無い人です。本当に聖霊の人は自分が無い。ということは、十字架において自分が無くされていることをはつきり受けとつている人です。相対的現実では、人間というものは自分もありますよ。けれども、それを突破された、もうひとつ奥の世界をもつていないとダメです。死に至るまで、私たちは矛盾構造の、しようがない者です。けれども、どこに本当に主座があるか。三日月が本当に満月となろうとしているか。あるいは、いい加減な三日月で今度は消えていくか。

そういう意味において、十字架は躓きのキリストであるが、この十字架を本当に受けとれば、今度は躓きが抜ける。十字架のキリストに来るまでは、地上のキリストに従っていたヨハネでもペテロでもヤコブでも、みんな躓いている。ゲッセマネの祈りの時にも眠ってしまった。

預言者といえども使徒といえども、みんな躓いていて、破れの器なんだ。イザヤ書53章の砕けを身をもって証したところの十字架の砕けを通してはじめて、砕けから本当の聖霊の突破にくる。突破・突入の世界に入る。

●サタンよ、退け

ペテロは、キリストを告白したところまでは、ちよつと良かった。ここのところは躓かなかつた。ペテロは時々、非常に成績がいい。そうすると、今度は落第点になる。その次を読めば分かる。マタイ伝16章、

「21この時よりイエス・キリスト、弟子たちに、己のエルサレムに往きて、長老・

祭司長・学者らより多くの苦難を受け、かつ殺され、三日めに甦えるべき事を示し始めたもう。

この事は三回言われた。

22.ペテロ、イエスを傍にひき戒め出でて言う

また出しやばつた。

『主よ、然あらざれば、此の事なんじに起こらざるべし』²³イエス振り反りてペテ

ロに言い給う『サタンよ、我が後に退け、汝はわが躓物なり、汝は神のこと

を思わず、反つて人のことを思う』(マタイ16・21〜23)

ペテロが「汝は神の子なり」と言った時に、その告白そのものは良かったから、キリストは受けとつてやったけれども、どっこい、その告白の中にまだ別な要素が入っていた。何かというと、ペテロが「メシヤ」と言った時に――ペテロは恐らくギリシヤ語を知らないから、



「メシヤ」と言った。大体、聖書というのは原典がギリシヤ語でも、本当はアラミ語ですから、アラミ語の聖書があれば本当は一番いい。キリストとお弟子たちはアラミ語で語っているんだから。その当時のヘブライの方言です——その「メシヤ」の中には、旧約の中にあるところの、この世に神の国を、神政をしくところの王者、世界を支配するところの王者を夢みている。今でも、政治的なこの世の王者としてのメシヤ、世界に君臨するところの王国を夢みている。だから、イスラエルという国ができたけれども、ただ手離しで喜ぶわけにいかない。彼らが本当に、

「わが国はこの世のものにあらず」

という、キリストのこの角度を受けとるのでなければ、イスラエル人はいわゆる相対的な国家の独立なんてことで喜んでいてはいかん。

それで、そういったものが混在していたから、キリストが、

「これから自分はこのようにして死ぬ」

と言った時に、ペテロはまるで自分の見当違いのことをキリストが仰ったものだから、

「とんでもないですよ。あなたがそんなことで死なれてしまったら、ユダヤの王者

としてのあなたはどうなるんですか」

というようなわけだ。

「私は地上の王者ではない。霊界の王者だ。そのためには十字架を通らなければ

ばいかん。お前は地のことを思う。サタンよ、退け！」

と。これが涙の出るようなキリストの言葉です。

●己が十字架を負え

だから、その後で何と仰ったか。

「²⁴ここにイエス弟子たちに言いたもう『人もし我に従い来らんと思わば、己をすて、己が十字架を負いて、我に従え。』(マタイ16・24)」

「人もし……」というのを、私はもつと強く、

「汝、我に従い来らんと思わば、己を棄て、己が十字架を負え」

と書いた。

「私の弟子となろうと思うならば、十字架を負って来い」

と。魂の中に十字架を負う。そうおっしゃるけれども、できないんだ、これは。福音書のキリストの言葉は、手離しで誰か及第できるなら、手をあげてください。

「できないことを片っぱしから言っておいて、これ福音とは何ぞや」

ということになる。普通の道徳よりかはるかに烈しい。モーセの十誡より烈しい。

「兄弟を憎む者は殺したるなり」

「女を見て色情を起こす者は姦淫したるなり」



とか。みんな、奥をつつこんで言われる。私たちはみんな落第です。モーセの十誡どころのさわぎではない。凄いですね、イエスというひとは。モーセの十誡よりか凄いことを言いながら、今度は、モーセの十誡よりかはるかに豊かなことを仰る。だから、私はモーセの十誡のことを「隠れたる福音」と言つたわけですけども、「露なる福音」はキリストがもたらした。

「十字架を負って我に従え」

と言つたつて、これはできない。決して、水を割つて仰らない。

「もう少しやさしく小池先生は言つたらよさそうなのに、あれでは分かりませんよ、

躓いてしまいます」

なんて。仕方がないんですよ、ある意味において。やさしく言わなければならない時もあるでしょうけれども。表現はやさしくても、中身は絶対にやさしくない。中身はやさしかったら、それは福音ではない。福音とはもの凄世界なんだ。だから、躓きなんです。ところがどっこい、あるひとつの門を通ると、またこんな楽しい世界はない。

だから、そこらのは違う。いわゆる御利益ではない。神さまの栄光が現れるということとは、自分がこの世的に何か幸福になるような御利益的角度とはおおよそ違う。この世でいわゆる幸福になつてごらん下さい。それで満足するか。何か知らないけれども、必ず寂しさがくる。空虚さが、虚しさがくるわけです。ということは、人間の魂はそういうものにはどうにもならないようにできている、ということなんです。それでは、なぜ本当のものに気がついてくれないか。それを求めないか、と言いたいわけです。皆さんの一人びとりの魂というのは、そんなに安つぽくできてない。

「全世界を得るとも、汝の魂の生命を失えば、何の益かあらん」

と、キリストが言われたのは、

「全世界よりも一人びとりの魂は重みがあるんだぞ」

ということですよ。

「25 己が生命を救わんと思う者は、これを失い、我がために、己が生命をうし

なう者は、之を得べし。26 人、全世界をもうくととも、己が生命を損せば、何

の益あらん、又その生命の代に何を与えんや。」(マタイ16・25〜26)

と。「己の生命を損せば」と、損得みたいな言葉を言うけれども、そうではない。神さまが与えようとしている生命の他に与えるものはない。死んでも死なない永遠の生命である。時間的な無限性ではない。永遠というのは質的なものを持っている。今日一日を本当に生きたら、

「もう私はたくさんだ、こんな世界は。もうきつきつと往かしてください」
と、パウロあたりも言いたいところなんだ。

「今はもう、キリストと共に向こうに往きたい。けれども、地上に置かれているのは、



人を救う使命があるから。行き詰まっている人、可哀相な人を、何とかして救いたい。また救わなければならない。だから、いつまでも居ますよ、使命の終わるまでは」

というわけだ。

そういうわけで、皆さん、掛け替えのない地上の人生ですから、私みたいに呑気なことをしてないで、どしどしやっていたいただきたい。

「先なる者は後に」

で、私はしんがりから行くから、のろまだから。皆さんはどしどし進んでください。私は天国の門が閉じる一番後に入っていくから。

だから、

「十字架を負ってみろ」

とは、これは負えるんです。今は、こういう言葉はありがたい。力になる。

●復活のキリストの予表

マタイ伝17章1節から、

「六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネを牽きつれ、人を避けて高き山に登りたもう。²斯て彼らの前にて其の状かわり、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ。³視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現る。⁴ペテロ差出でてイエスに言う『主よ、我らの此処に居るは善し。御意ならば我ここに三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤの為にせん』

いやはやどうも、ペテロはおめでたい人ですね、非常に正直者ですから。キリストはペテロのこの純情を愛された。ガタガタしているよりも、純情型の人の方が大事なんです。

⁵彼なお語りおるとき、視よ、光れる雲、かれらを覆う。また雲より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり、汝ら之に聴け』⁶弟子たち之を聞きて倒れ伏し、懼るること甚だし。⁷イエスその許にきたり之に触りて『起きよ、懼るな』⁸と言ひ給えば、彼ら目を挙げしに、イエス一人の他は誰をも見えざりき。」(マタイ17・1〜8)

ヨルダンで洗礼を受けた時と同じ言葉がここに響いてきた。

「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」

と。キリストが愛しまれ悦ばれたその姿はどうですか。完全に神の前に自分を明け渡している姿です。本当に平伏し自分を明け渡している時に神さまは悦びたもう。

神の光で彼の存在は完全に貫かれた。これは復活のキリストの予表です。甦りのキリストの予表をこの変貌の山で、これも徴をされた。この変貌の山で、その徴にぶつかりなが



ら、彼らは本当にここに甦りのキリストを、キリストの本質をやっぱり見ることができない。モーセとエリヤが出てきた。ペテロはただ、

「二つの庵をつくって、ゆつくりしてください」
なんて言った。

「ここに留まってください」
ということなんですよけれども。

キリストは地上においては枕する所なし。本当に神を彼は幕屋として歩いておられた。イエス・キリストの幕屋は神ご自身である。「聖霊の宮」とか何とかパウロが言ってますけれども。こういうところにきたら、皆さんは本当に瞑想しなければ、この17章は読めない。瞑想というのはもちろん祈りの世界です。キリストをありありと思ひ浮かべて、そして、その中に自分を投げ入れていくこと。そのキリストの光に照らされる。キリストの光は太陽の光以上に我々の全身にしみ込んでくる。変貌の山のキリストを祈りのうちで受けとっていく。何かしらんが、全身が生命と光と愛とに生きてくる。「変貌の山」の事態を、私たちは祈りの世界での大事な一つの、キリストに接するところとして、これを受けとっていただきたいわけです。そして、その角度に現実に入ったら、按手をすれば、病める者に力を与えることができる。むやみに按手してはいかん。

ペテロはやはり躓いたけれども、私たちはペテロを何も問題にしているのではない。この躓きのペテロと対照になっているキリストを初めから問題にしている。相対的に我々はまだこれから躓いたり転んだりするかも知れない。けれども、絶対にそれでへこたれないで、立ち上がって進む。躓かないで行く人よりも、はるかに前進する。却って力を得ていく。

「罪のいや増す所に恩恵はいや増す」

という、躓きになる言葉があるけれども、これを平面的な論理で考えてはいかん。

何をして、要するに、キリストに帰ることなんです。キリストを受けとることです、どういう事態を通して。そうすると、もう行き詰まらない人になる。いかなる事態も、どんな人生の相対的なプラスも相対的なマイナスも、本当の絶対的なプラスに変えていく。地上のプラス・マイナスを計算したらダメです。キリストを受けとっているから、過去のマイナスも全部本当のプラスにしてしまう。

●永遠の現実

十字架のことは、これからペテロがキリストに躓いてどうのこうのは、今は私はしゃべりません。最後は、ヨハネ伝の21章のところで、ペテロが復活のキリストにでっくわして、キリストに

「お前は私を愛するか」

とさんざんやられている。ペテロはあの時にはつきりとまだ答えきれない。それで福音書



のペテロは終わるんです。

我々の現実においてはつきり申し上げると、キリストの十字架は二千年前に起きたところの相対的な歴史的な現実であるけれども、これは相対的歴史的な事実であるに過ぎないのでは、絶対ありません。現在になお今、事実として、この十字架は迫っている。我に対する十字架として受けとられない限り、信仰の世界は絶対に成り立たない。それだったら、おとぎ話と同じことだ。

「宗教的天才が十字架にかかった」

なんていうものではない。これは贖罪という特別な使命をもった十字架であります。贖罪の十字架です。そして、

「わが肉を食らえ、わが血を飲め」

と最後の晩餐に言われた、その生命を受けとる。その生命は十字架の徴を通してやってくる。甦りのキリストは今、天界に行つて、私たちに聖霊をもつて臨んでおられる。

我々の相対的な過去も、このキリストの十字架によって全部贖い取られていきます。そして、聖霊の世界が一番現在なんだ。聖霊の愛の世界なんだ。だから、過去のキリストを現在において受けとるところに信がある。聖霊の愛を受けとるところに、本当の現在がある。それから、希望が——将来の終末の世界を受けとる——これがやはり現在化してくる。

「御国を来たらせたまえ」

というのは御国は来ているから祈れるんです。そういう意味において現在は永遠であります。永遠の質をいただいているところの現在なんです。信仰はこの現在において過去と将来を全部把握しているような驚くべき現^{うつ}の世界です。

もうひとつ、空間的に言うると、「天国と煉獄と地獄」ということ。キリストは地獄まで下つた。地獄に落ちている人たちのために執り成しもできる。祈りの世界で、天界の人と、また現在の人と、また信仰がなくて或は背いて落ちてしまったような人、そのための執り成しの世界が、また空間的にもある。クリスチャンの実存というものは、時間空間を、そのように掌握しているところの、本当の永遠の現実です。これが本当に生きているということなんです。キリストに生きているということはそれだけの厚みをもった、驚くべき構造を持つた世界です。

そういうわけで、福音書におけるところのペテロ、「躓きのペテロ」そのものを問題としているのではない。この躓きのペテロをいかに救わんとし、いかにこれを顧み、いかにこれを本ものに成そうとしておられるこのイエス・キリスト。このキリストの本願を本当に受けとるために、今私たちはこういうことを学んでいるわけです。

